不思議な詞

日が暮れ始めたような色彩の中利他は帰って来た。その表情に一切の迷いはなくどこか吹っ切れたような、そして泣いていたのが容易に察せられるほど両目は腫れていた。

「おかえり。いい顔になったじゃないか。」贈り物は役に立ったかい？」

カウンターに近づいてくる利他に向け女将が語りかける。

「はい。お陰で。」

そう言いながら利他は紙をカウンターの上に置いた。

「それはよかったよ。今日はもう部屋に戻って休みな。」

「本当にありがとうございました。」

疲れ果てていることは見るだけでわかる。番才はこの短い時間で別人のような落ち着きと何かを纏っている利他を見つめ、その背中に心の中で労いの言葉をかけた。言葉が刻まれ

た紙を大切に拾い上げ、利他は女将と番才に一度ずつ頭を下げ自室へ戻っていった。

「まるで別人ですね。」

「そうだね。何があったかはわからんが実に落ち着いていた。これは、準備が必要だね。」

「準備？何のですか？」

「あんたももう部屋へ戻りな。今日は付き合ってくれてありがとうね。」

自分が感じた以上の何かを感じ取ったのだろうと、番才は女将のその行動に特に説明を求めることをせず、「明日が楽しみです。」と言葉を残し部屋へ戻った。

翌朝目を覚ました番才は、誰に何を言われたわけでもなく一階へ降りていくと、既にそこには女将と利他の姿があった。

「おはようございます。随分早いですね。」

「おはよう番才。年寄りの朝は早いもんだよ。たっぷり寝れたようだね。」

「ええ。誰かを心配し続けるというのも意外

と体力を消耗するらしいので、昨日はすぐに寝てしまいました。」

番才のその言葉を聞き二人は微笑む。数日前の殺伐とした雰囲気などまるでなかったかのような この関係性に、番才は人の可能性への想いを強めた。

そのまま三人は奏涯の間へ向かい、迎えられた巨躯の案内人に紡木の元へ連れられた。

「おはようございます。随分早かったですね」

「すぐにできるかい？」

「ええ。こちらはいつでも大丈夫ですよ。」

その二人の会話から、紡木の言っていた「早かったですね」という感想がこの奏涯の間に来た時間帯のことではなく、自分が作詞を完成させたことに対するものだと知った利他は、

「早いんですか？」と横から疑問を投げかけた。

「ええ、わたしが思っていたよりかは。どんな経緯があったにせよ、想いを、それこそ償いなどを言葉にしようとするとどうしても

時間は掛かるものです。それを光に透かして

みてください。」

利他は言われた通りに紙を部屋の明かりにか

ざす。

「文字は透けていますか？」

「いえ。」

「だったら尚更ですね。」

利他は紙から紡木へと視線を変える。

「嘘は見透かされる〟と言います。安心して下さい。そこに記されたものは本心であり紛い物ではありません。」

紡木はそう言って微笑むと大きな水槽の乗った奥の作業台へと向かった。

「あの子の腕は確かだよ。番才あんたも一緒に行っといで。わたしは出来上がりを楽しみに待つとするよ。」

女将に背中を押され二人は紡木の後を追った。

「以前いらした時にあらかじめ五線紙を作り育てていました。」

最後の言葉で一気に訳がわからなくなる。

「〝育てていた〟って何ですか？」

利他は今日も大事に抱えている札を握りしめ、〝以前〟という単語にも反応していた。

「言葉の通りです。説明するより直接見た方が早いと思いますよ。どうぞ。」

紡木は身体を少し斜に向け、二人が水槽の正面に来られるよう作業台から距離をとり、掌が見えるように水槽を指す。

「これは・・・おたまじゃくしですか？」

視界に入り続けていた水槽の中で泳ぐ黒い音符のような生物に、番才は心の中で（なるほどな）と納得できた気がした。

「そうです。我々はそれを育て、利他さんあなたをお待ちしていました。そしてその子たちは既に成長しきっています。」

「これを・・・。」

利他は水槽の中で泳ぐ沢山のおたまじゃくしを目で追う。これで紡木の言う〝育てていた〟という言葉の疑問は晴れたが、まだいまいちこれから何をするのかがわからず、利他は紡

木の次の言葉を待った。

「わたしたち符刻奏師と呼ばれる者の役割は、まず依頼者の札から卵を回収し、それを〝符刻（ふこく）〟あなた達で言う作曲ができる状態まで育てるところから始まります。育て方はまた人によって異なりますが、そうして育てられた卵たちは依頼者そのものを反映します。」

番才と利他は紡木が空けてくれている理解のための時間を過ごし、共に険しい顔で頷いている。

「今その水槽の中にいるものたちは飢餓状態にあります。特別な環境で育てているので、彼らが欲しているのは別に食糧ではありません。」

二人の視線が同時に上がったことで、紡木は説明を続けながら水槽に近づいてきた。

「彼らが欲しているのは〝言葉〟なのですが、ここからはまた説明よりも実際に見てみてください。」

紡木のために両脇にずれた二人の視線が一度交わる。

「それでは利他さん。」

「はっ、はい！」

「その紙を水槽に入れてください。」

利他は紡木の放つ絶対的な安心感に、僅かに躊躇いをみせただけですぐに『償いの歌』と題された紙を水槽に沈めた。紙は水に浸かった部分から跡形もなく消え去り、利他の綴った言葉だけが文字通り浮力のない葉のように水中に漂いはじめた。

「今この水槽内は利他さん自身の深層世界だと思ってください。あなたがこれまで感じてきたこと、考えてきたこと、やってきたこと、そして受け取ってきたこと全てを反映したとても濃度の濃い液体です。」

白衣の袖をまくり、紡木は説明したばかりの水槽へと両腕を浸した。

「えっ、ちょっ！紡木さん大丈夫ですか？」

漂う文字へ群がるおたまじゃくしたちを眺め

ていた番才は、そう利他が発した声で何事かと紡木とその両腕を見た。

「大丈夫・・・ですっ！なるほど、これは素晴らしい。」

肘の辺りまで液体に浸かっているはずなのに、ガラス越しに見える水槽の内部には紡木の腕が写っていなかった。

「わたしのことは心配無用です。それよりもこれから言うことをお二人ともよく聞いておいてください。」

少しずつ息が上がっていく紡木は、目を見開きぽつぽつと汗をかきはじめている。

「人が何かを生み出そうとする時、それを生み出せるかどうかで大切なことは二つしかありません。一つは・・こうして自分のこれまでを育てているか、そしてもう・・・一つは、自分を偽らないかどうかです。」

この辺りから透明だった液体が黒く濁りはじめ、紡木の呼吸もさらに荒くなりだした。

「利他さん。あなたの・・人生は、とても

順風満帆だったとは・・・言えません。です

が、それを・・しっかりと、ご自身の中で育

て、捨てなかったことは・・どうか誇りに思

ってください・・。そして自分を偽ること

なく綴った・・・あの、詞を・・。」

そこで紡木は水槽から腕を引き抜き、その反

動で後ろに二三歩よろめく。番才と利他は咄

嗟に手を出すことができなかったが、少女が

椅子を差し出し紡木はそこに腰を下ろした。

息を切らした紡木の汗を布で拭い、ばたばた

とグラスに入った水を持ってくる。

「すいません・・お見苦しい姿を・・。」

途絶えそうな謝罪を述べる紡木の両腕は濡れ

ていない。またもや目の前で繰り広げられた

不思議な出来事に、番才は何から考え始めた

らいいのかわからなくなっていた。

「今言ったことは・・ことと作曲という生み

出し方に、おいては・・・不可欠な要素なの

です。ふう・・・。」

その後椅子の上で項垂れる紡木の回復を見守

り、やがて紡木の呼吸が整ってきた。

「改めて申し訳ありません。ですが、これで符刻はできました。」

立ち上がり自分から水槽へと目線を向けさせる。水槽の中身は炭を溶かしたような薄黒い色に変色しているだけで、ひと目見て完成しているとは思えない。

「もちろんどちらかが欠けていても、曲や物を生み出すことはできます。ですが、それらの寿命や鮮度はすぐに落ちる。これは単純に嘘や偽りで吹き込んだ魂が腐るからです。そしてそれらはすぐに見透かされ飽きられ、そういった魂たちは行き所をなくす。」

淀みない紡木の声に一瞬だけ優しさが消える。

「本当に。哀しいことだ・・・。」

何かが暴れた後のようなうねりと渦を作っていた液体が徐々におさまり、やがて元の透明な液体になったその水槽の中には、数体の成体の蛙が泳いでいた。

「えっ！？」と同時に声をあげる番才と利

他の姿に「まあ驚きますよねえ。」と声をかけ、

紡木はもう一度水槽に手を浸け、その中から五線紙を摘み上げた。

「えっ！？」

「そりゃ驚きますよねえ。」

五線紙には既におたまじゃくしが張り付いて

いて楽譜になっている。紡木は笑いながら少

女に指示を出し、少女が桶を持って作業台の

下に潜り込むと、少しずつ水槽の水嵩が減り

はじめた。

「これが利他さん、あなたのこれまでと詞

によってできた曲です。色々と大変でしたね。

ですが、その道のりは決して無駄ではありま

せんよ。これはそんなあなた宛の、彼からの

贈り物です。」

そう言って利他に差し出した五線紙には、

『Same Page』と題が刻まれていた。

「どのような曲になったのか、聞いてみた

くありませんか？」

「・・・はい。」

紡木は水槽の中でこちらに視線を送る蛙たちに五線紙を見せた。こうして奏でられた合唱は、宿を心地良く包んでいった。

〜続く〜